

# ロボット

原作 カレル・チャペック

潤色・演出 ノゾエ征爾



©阪野貴也

## 水田航生 インタビュー



1920年に発表され、人間が開発したロボットがやがて人間を脅かすようになる衝撃的な世界を描いた「ロボット」。アルキスト役を演じる水田航生さんが、兵庫県立芸術文化センターに来館！取材会で本作にかける意気込みを語りました！

### — 台本を読まれた感想は？

100年前に書かれた作品ですが、まるで予言書を読んでいるかのような、今やる意義のある作品だなと思いました。今回ノゾエさんが脚色をされ現代に落とし込み、新たな「ロボット」が誕生します。それを今の時代に届ける責任を感じて、しっかりとその世界観をお伝えできるように頑張りたいです。

### — アルキスト役について

僕が演じるアルキストは、ロツサム・ユニヴァーサル・ロボット社の建設部長で、ロボットの研究者です。一歩引いた立場から見守っていて、周囲の常軌を逸した行動に対して疑問を呈します。「一歩先を読んでいるかのようなセリフを言うこともあり、この物語を見ている人たちの代弁者のように思います。その男が最後まで生き残り、どういう境地に行き着くのか。難しい役ですが、丁寧に演じていきたいです。

### — この物語の「予言」とは？

いま、AIなどが人間に取って代わって様々なことができる時代になりましたが、カレル・チャペックがこの物語を書いた時は、ロボットが人間の仕事を取るなんてそんなバカなことかと思っていたかもしれないですね。でも、今後もっとそのようなことが起きてしまうんじゃないか、これはSFではなくて、もうドキュメンタリーに近くなってしまっているんじゃないかと僕は思いました。台本を読んで、ワクワクと恐怖が同時に

押し寄せてきたみたいな感覚になりましたね。自分が「生きている」ことを改めて考えるきっかけになりました。

### — もし、人間に成り代わられるロボットを自由に使えるとしたら？

水田航生をやってみてほしいですね(笑) 僕を分析して僕になってみてもらって、自分はどう見えるのか、客観的に見てみたいんです。でも、舞台俳優の仕事はやはり生身の人間にしかできないと思うので、取って代わられないぞ！と思っています。

### — 関西での上演について

僕は16歳で役者を志し、ひとり大阪から上京しました。新幹線を見送る母親の泣きそうな顔が、今も忘れられません。それからたくさんさんの舞台経験をさせていただきましたが、一つひとつの作品に向き合うまっすぐな気持ちはその頃と何も変わっていません。僕の原点がある関西で、この作品が届けられることを嬉しく思います。冬の上演になりますが熱い稽古をして、皆様にご覧いただける日を楽しみにしています。ぜひ観に行ってください！



2024 12/14(土) 15:00・15(日) 13:00 ※開場は開演の30分前

兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール

料金 9,500円(全席指定・税込)

※やむを得ない事情により、出演者などが変更される場合があります。予めご了承ください。 ※未就学児童の入場はご遠慮ください。

好評発売中

ご予約・お問合せ

芸術文化センターチケットオフィス

0798-68-0255

10:00~17:00  
月曜休み※祝日の場合翌日



最新の公演情報は  
こちらから

主催：兵庫県、兵庫県立芸術文化センター 企画制作：世田谷パブリックシアター  
後援：チェコ共和国大使館、チェコセンター東京、日本チェコ友好協会

「ロボット」 原作 カレル・チャペック「ロボット」(海山社・栗栖 茜訳) 潤色・演出 ノゾエ征爾

出演 水田航生 朝夏まなと / 菅原永二 加治将樹 坂田 聡 山本圭祐 小林きな子 内田健司 柴田鷹雄 根本大介 / 渡辺いっけい

裏面では「ロボット」の魅力を  
さらに深掘り! ▶

舞台は人造人間（ロボット）の製造販売を一手にまかなう工場。ロボットの進化により人間は労働から解放され、労働せずとも生活していけるようになった。やがて人間たちはすべてをロボットに任せようになり、自分からは動かないまでに退化してしまっただけで、そしてロボットたちは団結して反乱を起こし、人類抹殺の計画を始める――

## カレル・チャペックが約100年前に書いた「ロボット」とは？



「ロボット」  
作：カレル・チャペック  
翻訳：栗栖茜

カレル・チャペック(1890-1938)はチェコの国民的作家・劇作家。1890年にボヘミア地方で生まれ、プラハのカレル大学で哲学を専攻し、その後ベルリンとパリへ留学。パリではソルボンヌ大学で生物学を学び、帰国後はジャーナリストとして活動しながら、小説、童話、戯曲、エッセイなど多岐に渡る作品を執筆しました。

そんなチャペックによって1920年に発表された戯曲「ロボット」は、機械文明の発達が目撃して人間に幸福をもたらすのか否かを問いただす、チャペックの予言的作品。作品のタイトルでもある「ロボット」という言葉は、「労働」を意味するチェコ語「robota(ロボタ)」からチャペックが新たに生み出したとも言われており、後に数々のSF小説や映画などの原点となりました。

戯曲「ロボット」では、人間が労働をロボットに任せて次第に何もしなくなり、反してロボットはますます発達して人間より力を持つ様子が描かれています。

作品が書かれた時代には機械が人間に代わって働くということは夢物語でしたが、2024年の今、AIや機械の発達により生活や仕事が楽にこなせるようになり、まさにチャペックが描いた「ロボット」の世界に近づいています。また、スマートフォンやSNSがなくてはならない現代、この戯曲と自分の生きている状況を照らし合わせることができるのではないのでしょうか。果たして技術の発展や便利な暮らしだけが幸せなのか、幸せとはなにか、そして愛とは何なのか・・・100年前に書かれたということがさらに興味深い反面、恐ろしくもあるポイントです。

作品の舞台となるロッサム・ユニヴァーサル・ロボット社の社長ドミンを演じる渡辺いっけいさん、そしてその妻で人権同盟代表としてロボットの地位の向上を訴えるヘレナを演じる朝夏まなとさんより、コメントをいただきました！

朝夏まなと



COMMENT

ノゾエ征爾さんの演出を受けられること、それを初めて共演する俳優さん方と取り組めることにワクワクしています！100年以上前に作られた、まるで今の時代を予知していたかのような「ロボット」という作品が、現代ではどのように描かれるのか、また男性たちを翻弄するという、自分とかけ離れていると感じる今までに経験のない役柄なので、新たな自分に出会えるのも楽しみです。刺激を得てお芝居にどっぷり浸かって表現できるように頑張ります！

渡辺いっけい



COMMENT

100年前のこの戯曲、恐ろしいほど現代に突き刺さるその世界線もさることながら、劇的に絡み合っていく登場人物たちのその会話の熱量にまず驚かされました。面白い戯曲というのは演じるのが大変です。きっと悩みながら、台詞と格闘しながらの本番になる事でしょう。ノゾエ君には過去に何度も声を掛けて頂きながら一緒にいる機会がありませんでした。しかし漸く一緒にできる作品がこんなにもアグレッシブな戯曲になるとは！しかも舞台では初共演の役者さんばかり・・・。身震いするほど初めてづくしのこの座組で「熱い冬」を、濃密に過ごしたいと思います。